

周公大タイムズ

周南公立大学生の文化・スポーツ活動のいまをつたえるNews Letter

第4号（2026年7月発行）

特集：2026年春シーズンの躍進を振り返る！

2026年春シーズンは、運動部の学生たちの活躍が顕著でした。周公大タイムズ第4号では、その中でも特に注目すべき団体や選手たちの活躍を取り上げます。

【硬式野球部】周南からの逆襲。目指すは日本一！



6月9日朝。前夜からの雨が降り続いていた。天気予報は曇りだったが、試合開始時刻が迫ってきていても、街を歩き交う人たちの傘はまだ開いていた。国立競技場横の通路を抜けて神宮球場へ。9時ちょうどにスタンドに座ったときは、傘はいらなくなっていた。「プレイボール！」。中国地区代表としての熱い戦いが始まった。

―春のリーグ戦は見事な成績でしたね。

早川彰太郎主将（経済学部4年）：8勝2敗で勝ち点4でした。

―去年の春のシーズンは、リーグ戦最下位で入れ替え戦を経験しました。

早川：はい。前身の徳山大学の時代から二部リーグ戦に落ちたことがないのは、周公大だけです。昨春は接戦を落とすことが多くて、悔しいシーズンでした。「私立大学から公立大学になったから弱くなった」と言われたくない。その想いが強くなりました。夏に鍛えて、秋シーズンは2位でした。

―神宮球場での初戦の奈良学園大学戦は5回コールド。11-1で圧勝でしたね。

早川：自分たちがやってきたことが出た試合です。打たせて取るスタイル、ランナーを進めるバunting、中国六大学リーグ戦から意識してきたことができました。私たちは“チーム力”が強みです。抜き出た選手はいませんが、みんなが当たり前のことを当たり前にやる。広い視野を持つ。自分の役割を自覚し、次の選手にどう繋ぐか。そういうことを考える力が強いと思っています。

―スタンドから見ていて、気分が良かった。(笑) 2回戦の日体大戦は厳しかったですね。

早川：リズムが取れませんでした。力負けです。やはり強かった。ここぞというときに相手はギアをあげてくる。300人を超える部員たちの代表ですから違います。でも、私たちなりの手応えはありました。いまは「鍛える夏」を過ごしています。秋は日本一になります。

2年前、1年生だったスポーツ健康科学科の学生さんと約束した。「私を神宮に連れて行ってくれ！」。でも、昨年の春シーズンは最下位。最終戦終了後、彼らが悔し泣きする声がスタンドに響いた。そこからの「逆襲」。彼は約束を守り、私の夢を叶えてくれた。そして、早川さんと次の約束をした。今度は神宮球場で日本一になる風景を見せてくれる。周南からの「逆襲」のドラマが再び見られるはずだ。秋のリーグ戦は9月に始まる。日本一を目指す階段を、彼らは登っていく。夢は、再び叶う。

（スポーツ健康科学科教員：清原泰治）

※周公大タイムズは、スポーツ健康科学科の学生と教員の有志で発行しています。

発行責任者：清原泰治（スポーツ健康科学科教授）

【レスリング部】武重選手！目指せ、レスリング日本一！

5月21日から24日にかけて開催された、令和8年度明治杯全日本選抜レスリング選手権大会で3位という輝かしい成績を収めたレスリング部の武重毅留選手(人間健康科学部スポーツ健康科学科3年)に、これまで競技にどのように取り組んできたのか、そして大会で入賞した今の思いや今後の目標についてお話を伺いました。

—明治杯で3位に入賞してどんな気持ちですか。

武重：昨年11月の全日本大学レスリング選手権では3位、今年3月のU-23全日本選手権では2位と、学生大会では徐々に結果を残せるようになっていました。しかし、社会人や日本代表クラスの選手も出場するシニアの全日本選手権大会で3位に入賞できたことは、それまでとは比べ物にならないほど大きな喜びでした。大学1年生の夏には前十字靭帯を断裂で手術と長いリハビリを経験し、思うように練習や試合ができず、不安を感じることもありましたが、「以前より強くなる」という気持ちで復帰後も努力を続けてきました。その経験があったからこそ、今回の結果は競技人生の中でも特に価値のあるものだと感じています。

—レスリング以外でどのような活動に力を入れていますか。

武重：ゼミ活動で、8年ぶりに開催された勝間地区大運動会の運営に力を入れました。私は競技計画や会場レイアウト、タイムテーブルの作成に加え、地域企業への協賛依頼や助成金申請のプレゼンテーションにも取り組みました。地域の方々や学生で何度も話し合いを重ね、一つのイベントを作り上げる過程で、相手の立場を考えて行動することや、多くの人

と協力して目標を達成する大切さを学びました。当日は子どもから高齢者まで幅広い世代の方々が笑顔で交流する姿を見ることができ、地域に貢献できたことに大きなやりがいを感じました。

—最後に、今後の目標は何ですか。

武重：目標は、学生タイトルの獲得とシニアの全日本選手権大会で優勝することです。そのため今回の結果には満足していません。今大会では、栄養面やメンタル面で新たに取り入れたことがあり、それが結果につながったと感じています。良かった点は自信に変え、新たに見つけた課題は一つずつ改善しながら、夏のインカレ、そして冬の天皇杯で優勝できるようにこれからも日々努力を続けていきます。



(写真は、Kotone Narikuni 様提供)

(スポーツ健康科学科3年：津田 縁)

【軟式野球部】「打ち勝つ野球」で大躍進！

軟式野球部が、西日本地区軟式野球リーグ戦一部リーグで準優勝を果たし、全国大会への出場を決めた。昨年度まで二部リーグに所属していたチームは、一部昇格1年目で快進撃を見せ、中四国地区2位という快挙を達成。学生主体で活動するチームが、仲間との結束力を武器に全国の舞台へ挑む。渡邊 樹主将(人間健康科学部福祉学科3年)に、チームの強さや普段の活動について話を伺った。

—全国大会出場を決めた今の気持ちを教えてください。

渡邊：一部昇格1年目で全国大会出場を決めることができ、本当にうれしく思っています。新チームになってから順調に勝ち上がることができました。リーグ戦では松山大学、岡山大学、就実大学に勝利し、準優勝という結果を残すことができました。中四国で2位という結果は、チーム全員の努力が実った証だと思います。

—チームの強みはどのようなところでしょうか。

渡邊：一番の特徴は「打ち勝つ野球」です。他のチームと比べても打球の強さは圧倒的です。点を多く取る攻撃力が持ち味で、守備で失点をしてでも最後まで諦めずに点を取りに行く粘り強さがあります。ピッチャーは2人しかおらず、経験のない選手が登板する試合もありましたが、それでも全員でカバーしながら勝利を目指しました。

—普段の活動について教えてください。

渡邊：部員は30人、マネージャー2人で活動しています。週1回、周南緑地公園で全体練習を行い、それ以外の日は自主練習が中心です。ジムで体を鍛えている部員が多く、1人を除いて全員が高校時代に硬式野球を経験者しています。学生主体で運営しているため、一人ひとりが責任を持って行動しています。



—チームの雰囲気はいかがですか。

渡邊：学年関係なく仲が良く、練習や試合では真剣に取り組みながらも、普段はとても明るい雰囲気です。部員全員が心から野球を楽しみながらプレーをしています。休日にはアルバイトに励む部員もいますが、みんなで県外へ日帰り旅行に行くこともあります。オンとオフの切り替えができることが、チームの強さにつながっていると思います。

昨年二部リーグから昇格したばかりの軟式野球部は、学生主体ならではの団結力と、圧倒的な打撃力を武器に、全国大会出場という大きな成果をつかみ取った。前回大会では3人がベスト9に選出されるなど、個々の選手の実力も高い。8月に東京都八王子市で開催される全国大会では、周南公立大学らしい「打ち勝つ野球」でさらなる躍進が期待される。

(スポーツ健康科学科3年：中村 知愛梨)

【卓球部】積み重ねた地道な努力。いざ、全国へ！

5月21日から5月24日にかけて、鳥根県立浜山体育館で開催された第77回中国学生卓球選手権春季大会。卓球部は女子団体で準優勝し、7月に横浜市で開催される全日本大学総合卓球選手権大会への出場が決定した。一部昇格からわずか1年でつかみ取った全国への切符だ。女子団体代表の堀 桃菜さん（人間健康科学部スポーツ健康科学科3年）に躍進の舞台裏について聞いた。

一日ごろの練習はどのように行っているのですか。

堀：月曜日と木曜日の16時30分から19時30分に8号館で練習しています。これが、既定の練習で、私と先輩は火曜日と金曜日に社会人チーム「トクヤマ」で自主練習もしています。ほかのみんなも8号館で自主練習に励んでいます。

一中国大会は、どのような戦いぶりでしたか。

堀：中国大会は総当たり戦でしたが、幸運が積み重なったように思います。フルゲームまでもつれる厳しい局面も多く、5番手の勝負で決まるゲームもありました。その中で全国大会に行つてやろうという強い気持ちで勝ち進みました。



卓球部は昨年の入れ替え戦で一部へ昇格したばかり。初めて挑んだ一部での中国大会で準優勝を果たし、全国大会出場を決めた。部員たちは通常練習の後も21時30分頃まで自主練習を続けることが多いという。一部昇格からすぐに全国大会出場という快挙の裏には、選手一人ひとりの地道な努力があった。

一スポーツ健康科学科での学びは競技にどのように生かされていますか。

堀：授業で学んだことは実践に生かされています。スポーツ栄養学等を通して、練習前の補食の内容が変わりました。また、コンディショニング論等の授業を通して、練習前後のストレッチも以前より丁寧に行うようになりました。

一今後の目標、全国大会にける思いを聞かせてください。

堀：入部当初からの個人的な目標である、個人、ダブルス、団体での全国大会出場はすべて達成しました。全国大会後の8月に、一部・二部の入れ替え戦が行われます。その大会で今年も一部残留を決めます。7月に行われる大会は、全国レベルの格上のチームばかりです。緊張するより力を出し切ろう。「挑戦者」の気持ちでチーム一丸となって頑張ります。

入部当初からの目標をすべて達成しているという堀さん。何事にも目標を持って取り組むが、すべて達成するのは至難の業だ。その中でも、この約3年間で地道に努力を積み重ね、つかんだ全国大会の舞台。「挑戦者」として悔いの残らないプレーで、笑顔で全国大会を勝ち抜いてほしい。（スポーツ健康科学科3年：清水ことね）

【アーチェリー部】熱い想い「センパイと一緒に全国大会へ！」

6月に静岡県掛川市のつま恋リゾート彩の郷で開催された全日本学生アーチェリー女子王座決定戦に、中西春華さん（人間健康科学部看護学科3年）、杉山里桜さん（同スポーツ健康科学科2年）、日高綾音さん（経済経営学部2年）の3人が、中四国地区代表として出場した。2年前はわずか3人の部員だったチームが全国大会に出場するという快挙。3人を支えたものは何だったのか。大会を終えた3人に話を聞いてみた。

一中国四国学生アーチェリー王座決定戦で優勝して初の全国大会への切符をつかみましたね。

中西：そうです。大会は5月10日に岩国市で開催されました。この日は3人とも調子が良くて、予選から完全優勝でした。団体で初めて出場でき、良い結果を残せたのでとてもうれしかったです。

一つま恋リゾートではどうでしたか？

中西：決勝トーナメントの1回戦で関西の強豪チームにあたってしまって敗退しました。でも、相手は高校で全国制覇した選手が2人もいて、日本のナショナルチームのメンバーで…。負けたけど、数少ない国公立大学出場校の1校として出場できて満足しています。

一中西さんはずっと一人で練習してきましたね。

中西：入学したときの部員は3人でした。先輩が2人いましたが、就活などでなかなか練習に来られなかったんです。でも、徳山高専の生徒さんたちが合同練習に来てくれるようになって、今も一緒に練習しています。毎日16時30分から21時までですが、自主的な取り組みを重視しているので、授業の忙しさなども考慮しながら練習に参加しています。

一杉山さんと日高さんは高校までは弓道をしていましたね。

杉山：そうです。周公大には弓道部がないので、新しいことに挑戦したいと思い、アーチェリー部に入部しました。初心者で何も分からなかったのですが、仲間が丁寧に教えてくれたので、努力し上達することができました。アーチェリー部は人数がほどよく雰囲気明るいので（女子8人、男子5人）楽しく練習ができています。

日高：私も同じように初心者でした。70mの距離を練習し始めたのが中四国王座の2週間ほど前でしたが、絶対に全国大会に出るという思いで練習していました。アーチェリーは弓道と違って、的のより中心を狙う楽しさがあるのでとても好きです。



—そういう2人が、中四国大会の前に思っていたことは何ですか。

杉山：中西センパイの引退が近いと分かっていたので、「絶対にセンパイを全国大会に連れて行く！3人で全国に行く！」と強く思っていました。実現できてうれしかったです。

【陸上競技部】4年間の集大成のスタートラインに立つ！

9月5日から7日までの3日間、神奈川県・日産スタジアムで第95回日本学生陸上競技対校選手権大会（全日本インカレ）が開催される。全国の学生トップアスリートが集うこの舞台に、約70名の部員を擁する陸上競技部からは4名の選手が出場する。今回は、4年生として迎える集大成のシーズンに200mの標準記録を突破し、全日本インカレ出場を決めた吉留陸叶さん（経済学部ビジネス戦略学科4年）に、お話を伺った。

—競技歴について教えてください。

吉留：小学2年生からサッカーと陸上を始めました。サッカーがメインで、足を速くしたいという思いから陸上を始めました。4×100mリレーで全国大会に出場したことをきっかけに、中学校から本格的に陸上競技を始めました。中学、高校と陸上に打ち込んでいましたが、高校では目標にしていた先輩が引退したことで、一度は競技へのやる気が薄れ、勉強との両立にも悩みました。しかし、大学で出会った4年生の先輩方が、強さだけでなく、競技に真剣に向き合いながら楽しむ姿を見て、「自分も4年間やり切ろう」と考え方が変わりました。

—大学4年間の競技生活はどうでしたか。

吉留：大学では、1年生からリレーメンバーとして活躍し、中四国インカレでも入賞するほど実力のある同級生の存在が刺激になりました。彼の存在は僕にとって大きかったです。そこから、着実に実力をつけていき、昨年の4月頃には、走るたび自己ベストを更新することができました。しかし、夏にスランプに陥り、記録が全くでなくなりました。そこで外部支援コーチから課題を指摘していただき、夏の間も冬季練習のつもりで走りを一から見直しました。その結果、今年4月、5月には再び記録が大きく伸びました。

入部当初100m11秒5だった吉留さんは、4年間で自己ベストを10秒57まで更新。約1秒の飛躍を遂げ、中四国インカレでは100m、200mで7位入賞、西日本インカレでは200mで大学初となる5位入賞を果たした。

—さて、この先、どうしましょうか。

杉山：山口県トップスポーツクラブに、女子サッカー部とレスリング部と一緒に認定してもらいました。ですから、いまの力を今後も維持・向上していきたいです。いまは自主的な活動が主ですが、これからは組織的な活動も大切にして、もっと上を目指したいです。

アーチェリー場は大学の隅っこにあります。そこで、一人で毎日コツコツと積み上げてきたセンパイの努力。アーチェリーを始めて間もない後輩たちが「センパイと一緒に」という熱い想いでつかんだ全国大会出場。こういうチームはきっと強くなります。次は全国大会での勝利を目指してください。

（スポーツ健康科学科教員：清原泰治）

陸上競技部は16時30分から21時まで練習を行い、それぞれ自分で決めた練習が終わった部員から帰宅する。吉留さんは最後まで競技場に残留して練習に励むことがほとんどである。その努力は着実に結果として実を結び、今では部員たちの目標となる存在となっている。

—西日本インカレを振り返って、全日本インカレへの思いは。

吉留：西日本インカレの結果には大満足しています。順位を目標にするのではなく、高いレベルの中で、どれだけ自分の走りが通用するのを楽しみに大会に臨みました。結果、順位がついてきてくれてとてもうれしかったです。全日本インカレまでは少し時間があるので、それまでの過程を大切に、自分の力がどこまで通用するのか挑戦したいと思っています。そして今後は個人タイトルを獲得し、これまで支えてくれた両親に少しでも恩返しができるでしょうしです。



全日本インカレには、吉留さんの他にも、芹田悠花さん（スポーツ健康科学科1年）が女子100mと200mに、渡辺紅季さん（スポーツ健康科学科2年）が5000m競歩に、烏田歩美さん（スポーツ健康科学科2年）が100mハードルに、女子4×100mリレー（芹田、眞鍋芽衣、藤村美月、石倉珠妃：いずれもスポーツ健康科学科）も出場します。みなさんの健闘を祈っています。

（スポーツ健康科学科3年：清水ことね）